



筑紫女学園大学リポジト

集合名詞のカテゴリー分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 公開日: 2024-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000005

集合名詞のカテゴリー分析

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Collective Nouns

Takafumi OGATA

1. はじめに

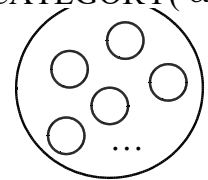
本稿では、カテゴリー分析で集合名詞を考察する。カテゴリー分析とは、カテゴリーと成員の関係をスキーマ表記することで、言語形式の意味や特性を特徴付ける分析になる。結論から言えば、集合名詞は、カテゴリーと成員の可算・不可算を判断基準として、大きく3タイプに分けられる。そしてタイプに応じて、ふるまいや特性が異なり、主語と動詞の呼応に影響を及ぼすことを示す。

このタイプ分けに向けて、付随していくつか考察する。一つめはタイプ分けのもととなる可算・不可算の基準である。緒方(2022)で提案した可算、不可算の基準をもとに、これを修正する。二つめは、主語と動詞の呼応について考察する。呼応には、ときに相反する原理が存在するが、それらをカテゴリースキーマの観点から1つにまとめることを提案する。そして三つめに集合名詞を規定する。集合名詞はどこまで、また何まで入るのが、研究者によって異なる。これをカテゴリースキーマの観点から定めていく。

以下2節でカテゴリーと集合名詞の関係を見る。3節では分類の基準となる可算・不可算について考察し、集合名詞のふるまいの違いをもとに3タイプに分ける。4節では主語と動詞の数の一致について考察する。5節で集合名詞の3タイプのカテゴリースキーマを示し、各タイプの特性を見ていく。そして6節で集合名詞と同じスキーマを持つ、集合体の固有名詞を排除すべく、排他的境界が2種類あることを述べ、可算・不可算の基準、集合名詞の再規定を行う。

2. カテゴリーと集合名詞

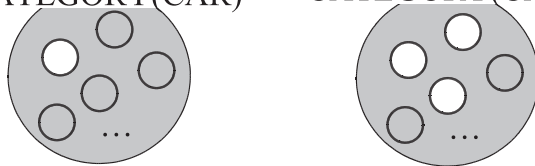
カテゴリー分析では、(1)のようなカテゴリースキーマを用いて、言語表現の意味や特性を表す。スキーマには通例、カテゴリーと成員が存在する。成員には個 (1) CATEGORY(α)
体成員と属性成員が存在するが、集合名詞の議論では個体成員のみが関わる。個体成員とは、何らかの境界を持ち、他との対比をもとに存在する成員である。個体成員を小丸で表記する。



スキーマは通例、そのままの形ではなく、焦点があたり前景化されたり、背景化がおこる。例えば可算名詞 car で言えば、カテゴリー CAR 内に、複数の個体成員 car が存在する。単数であれば成員の一つが前景化され((2a))、複数であればその数分だけ

前景化される((2b))。前景化された成員が言語化され、それ以外の部分に背景化がおこる(網掛け表記)。

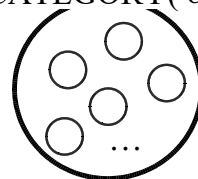
(2) a. CATEGORY(CAR) b. CATEGORY(CAR)



集合名詞の場合、(2)と異なり、

言語化されるのは、成員ではなく、カテゴリーになる。スキーマが(3)で、カテゴリー全体に焦点があたり言語化される(太丸表記)。カテゴリー全体は、成員の集合体となっており、その集合体に名称がついている。そのため(2)と違い、成員とカテゴリーを同じ名称で呼ぶことはできないし、成員には名称がないことが普通である。ただし成員を別名称で呼ぶことはある。

(3) CATEGORY(α)



例えば team で考えると、カテゴリー TEAM は成員の集合体となっており、それに焦点があたり言語化される。構成員である各成員は、集合体ではないため、team の名称で呼ばれることはない。その代わり成員を数えるときには、a member of the team のように、別単語(member など)の助けを借りて数えることとなる。カテゴリー全体は、いわば容器のようなものであり、成員の集合体なので、全体と部分の関係がなりたっている。そのため(1)のような普通の可算名詞とは、成員とカテゴリーとの関係が異なり、言語化されるものも違ってくる。

ここまでの内容をもとに、集合名詞を簡略にまとめたものが(4)になる。暫定的にこの定義で論を進める(以降、2回修正される)*1。

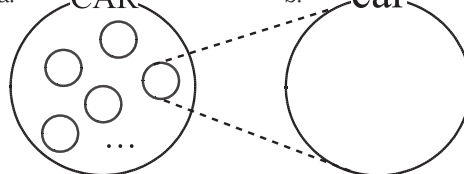
(4) 集合名詞(仮定義1):

集合名詞とは、個体成員の集合体としてのカテゴリーに焦点があたり言語化される名詞である。

(4)の「個体成員の集合体」には、2つの含意がある。一つめは集合体であることから、複数の個体成員が認識されている。認識がなければ集合体と見なされないからである。二つめは成員とカテゴリーが、いわば全体と部分の関係が成立することを示している。次に「カテゴリーに、焦点があたり言語化」では、言語化されるのが成員ではなく、カテゴリーと述べている。

しかしここで疑問が生じる。例えば car でさえ、部品の集合体であって、(3)と同じ構造を持つのではないかという疑問である。しかしそうではない。成員としての car は、(5b)のスキーマを持つ。(5b)は1つの個体成員を拡大したものになる。個体成員 car は、その部品が意識されず、一つの単体とみなされている。そのため(5b)では、主観上意識されない部品が、個体成員内の成員とはならない。(4)の「個体成員の集合体」と主観として認識されない。通例 car は集合体ではなく、個体として見られている。客観的に構成部品の集合体かどうかではなく、どう認識するかでスキーマが決まり、意味が決まる。

(5) a. CAR b. car



集合名詞においては、(3)からさらに細分される。というのもカテゴリーと成員の可算・不可算

のふるまいが異なるものが、3タイプあるからである。次節で前提となる可算・不可算の基準を考察し、この3タイプを示す。ただし具体的なカテゴリースキーマ等の提示は、5節で行う。というのも分類にあたり2つの前提、可算・不可算の基準、および主語と動詞の数の一致を考察する必要があるからである。まずは次節で可算と不可算を見ていく。

3. 可算と不可算

本節では、集合名詞の分類に向けて、可算・不可算を考察する。まず可算を規定することから始めたい。緒方(2022: 55)では可算・不可算の基準を(6)とした。またそこで用いる排他的境界の種類を(7)とした(ただし(6)は6節で修正される)。以下に基準を示す。

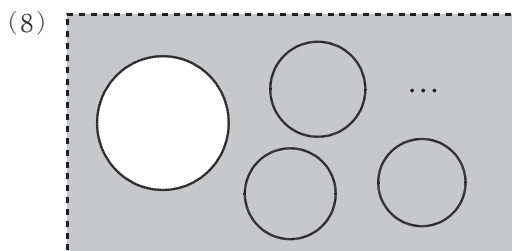
(6) **可算・不可算の基準(仮)**：カテゴリースキーマにおいて、成員に排他的境界があれば、その成員は可算となり、なければその成員は不可算となる。

(7) **排他的境界の種類**：排他的境界には、(i)他カテゴリーの成員と区別する特性(形態、種類など)、(ii)同一カテゴリー内の他成員と区別する特性(定量的特性(構成員、数量、時間、出来事、容器類)など)の二つがある。

(6)では可算・不可算は、排他的境界の有無で決まると述べている。従来、境界があるとか、形があると言われてきたものに相当するが、「排他的」がついて排他的境界となっている。これはカテゴリースキーマに基づく概念になる。そもそもカテゴリーと認められるには、2つ方法がある。

一つは内側からのカテゴリー化である。特性などによってカテゴリー成員が決まる。この場合、周辺部の成員、言い換えれば境界近くの成員はあいまいとなる。一つの特性がすべての成員に共有されているとは限らず、複数の特性で成員が判別される場合もある。

もう一つは外側からのカテゴリー化がある。これは他カテゴリーを背景化することで定まる。他カテゴリーとの対比により、それとは違うと認識することで、カテゴリー化を行う。この場合、他カテゴリーとの境界をはっきりしており、そこには明確な境界線が存在する。スキーマで示したものが(8)である。この2つめのプロセスをここでは「排他的」という用語を用いている。



そしてこの排他的境界を持つものだけが可算名詞となる。

このとき境界には、その境界の種類と度合いに応じて3種類を設定する。非境界、弱境界、排他的境界の3つになる。非境界は、境界を意識しないものになる。境界の有無というより、境界を意識せずに概念が成立している。抽象名詞や物質名詞など、はっきりと他と区別する境界自体が存在しないかのように認識している。特性などもこれに入る。

一方弱境界と排他的境界には、境界が存在すると認識される。弱境界は、排他的でない境界を指し、境界の度合いが弱い。そのため非境界と同様、不可算となる。境界があるのに、数えることができない。境界があっても、必ずしも可算とはならない。例えば料理の材料など形自体があるのに、不可算になるのは、それが他カテゴリーと区別するための形ではないからである。つまり排他的境

界ではないから、不可算となる。

(9) a. There's some cucumber in this sandwich. b. Put some apple and pear in the salad.

最後の排他的境界は、他カテゴリーとの対比によって生じる境界で、明確な境界となる。境界が明確なので個体としての認識が強く、(6)で示したように、排他的境界があれば可算となる。

ここで集合名詞に話を戻す。集合名詞では、カテゴリーも成員も境界を持つと考えられる。(6)では成員の可算・不可算に限定しているので、これをカテゴリーと成員の両方に拡大して論を進める(6節で修正)。集合名詞は、この可算・不可算に関して、異なるふるまいがある。集合体であれば、当然ながら、他の集合体との境界がある。成員も集合体の構成要員たるべく、個体成員として認識される。ということはカテゴリーも成員もどちらも何らかの境界を持つとなる。しかし可算・不可算とふるまいがことなるのは、境界があるとしても、弱境界と排他的境界に分かれることを意味する。カテゴリーと成員で、どちらの境界になるかで組み合わせが異なってくる。

具体的には集合名詞は、可算・不可算のふるまいをもとに、3分類される。タイプ1：集合体は数えられるが、集合名詞を使って成員は数えられない、タイプ2：集合体は数えられないが、集合名詞を使って成員を数えることができる、タイプ3：集合体も成員もどちらも集合名詞を使って数えることができない、がある(cf. 久野・高見 2009)。この3つのタイプを各々、Type A、Type B、Type C と名付けていく。これらタイプに含まれる集合名詞、及び具体例は5節で後述する。

ここで各々の境界を表で示す。弱境界は境界として弱く不可算、排他的境界は境界として強く可算になることから、3つの Type は、カテゴリー及び成員において、それら境界は(10)のようになる。

(10)	Type A	Type B	Type C
カテゴリー	○：可算(排他的境界)	×：不可算(弱境界)	×：不可算(弱境界)
成員	×：不可算(弱境界)	○：可算(排他的境界)	×：不可算(弱境界)

境界の違いに起因してタイプ分けが起り、ふるまいが異なってくる。境界が排他的境界か、弱境界かが重要な意味を持つ。そしてこの境界の違いを、カテゴリースキーマの違いとして表記していく。具体的なスキーマの提示は、5節で行うこととし、次節では主語と動詞の数の一致について見る。集合名詞での主語と動詞との呼応を考察するための前提部分を見ていく。

4. 主語と動詞の一致(数の呼応)

集合名詞では、主語と動詞の呼応が問題となることがある。一般的には、主語が単数形なら動詞は単数動詞、複数形なら動詞は複数動詞で呼応する。しかし集合名詞の場合、主語が単数形であっても、複数動詞が呼応したりする。つまり言語形式だけで動詞の呼応、ひいては数の一致がおこるのではなく、いくつかの要因によって決まってくる。

その要因を端的にまとめたものに、Quirk, *et al.* (1985: 757)がある。そこでは、主語・動詞一致の3原理を挙げている。文法的一致の原理(the principle of grammatical agreement), 概念的一致の原理(the principle of notional agreement), 近接の原理(the principle of proximity)の3つである。

文法的一致の原理は、文法的なもので、単数名詞であれば単数動詞を、複数名詞であれば複数動詞を要求する。その他に定形節、非定形節、前置詞句や副詞や主要部などについての規則がある。文法的一致の原理が基本であるが、次の2つの原理は、文法的一致の原理に矛盾することもある。まず概念的一致の原理は、意味的に単数であれば単数動詞、意味的に複数であれば複数動詞が現れる。単数名詞であっても複数動詞、複数名詞であっても単数動詞が現れたりする。近接の原理は、文法的な一致や概念的な一致とは違い、先行して単に距離が近い名詞句と呼応して、動詞の数が決まる。しかし Quirk, *et al.* (1985: 757) が述べるように、近接による一致は、その場で起こる対話が主で、書き言葉においては、文法的一致に修正されることもある。この3つの一致の具体例を、文法的一致、概念的な一致、近接の一致の順で、(11)-(13)に示す。

(11) a. My daughter watches television after supper.

b. My daughters watch television after supper. (Quirk, *et al.* 1985: 755)

(12) Her family are quite well off whereas Celie's family is poor.*2 (Levin, M. 1998: 99)

(13) Not only you but also I was entirely ignorant of the fact.

集合名詞の場合、文法的一致に加え、概念的な一致が起こりやすい。単数形という形式が同じでも、単数動詞と複数動詞のどちらも取れる場合がよくある。そもそも集合名詞は仮定義(4)で見たように、複数の個体成員を認識しつつも、カテゴリー全体が、成員とは別の集合体として言語化される名詞である。複数成員を認識することから複数の意味を、カテゴリーが集合体になっていることから単数の意味を持つ、いわば複合的な意味である。言語形式にかかわらず意味的な観点から、単数と複数のどちらにも呼応する可能性がある。これは焦点または前景化の問題と言える。複数成員が前景化されれば複数動詞に、カテゴリー全体に焦点があたり成員が背景化されれば、単数動詞に呼応する。

つまりカテゴリースキーマにおいて、焦点の当たるものに応じて、呼応が決まると考えられる。たとえ同じスキーマであっても、焦点あるいは前景化されるものが異なり、単数動詞や複数動詞との呼応が決まる。このことを規定したものが、(14)になる。

(14) 主語と動詞の数の一致:

主語名詞のカテゴリースキーマで前景化されたものと、動詞は数に関して一致する。

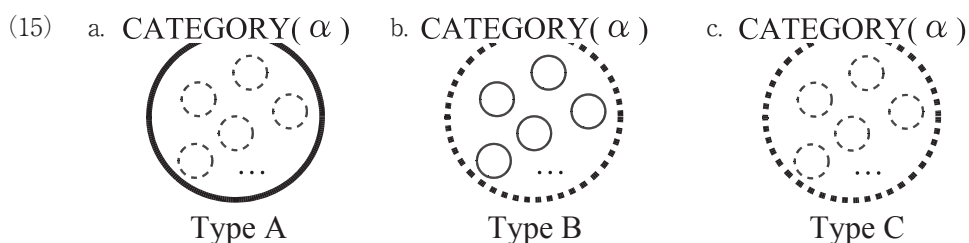
Quirk, *et al.* の3つの原理で言えば、文法的一致、概念的な一致では、カテゴリーに焦点があたり前景化されれば単数呼応、複数成員が前景化されれば複数呼応になる。近接の一致では、先行する近い名詞句が前景化され、その数に応じて呼応が決まる。単に原理を3つ並べただけでは、どれが適用されるかが分からない。よって3つの原理は(14)の一つにまとめられることとなる。

この(14)は集合名詞に限定したものではない。文法的一致では単数であれば単数成員が、複数であれば複数成員が前景化される。概念的な一致の場合、前景化されたものが、全体の意味を担う。近接の一致の場合、先行する名詞句で一番近いものが前景化され、数の一致が起こる。近接の一致では、再度前景化を見直し、文法的一致と合致するものが前景化が起こることもある。これは前景化が絶対的なものではなく、様々な要因により、変化しうることを意味している。次節では集合名詞の3分類について考察するが、このとき数の呼応についても見る。呼応に関しては、本節の考えを

前提として進めていく。

5. 集合名詞の3分類

3節で集合名詞には3タイプがあることを示した。カテゴリーと成員の可算・不可算によって分類したもので、[Type A]はカテゴリー(集合体)が可算、成員が不可算、[Type B]はカテゴリー(集合体)が不可算で、成員が可算、[Type C]はカテゴリー(集合体)も成員も不可算になる。そして排他的境界の有無で可算・不可算を規定し、不可算を弱境界、可算を排他的境界を持つとした。この境界の違いをスキーマで示したものが(15)になる。実線はそれが排他的境界であることを、破線はそれが弱境界であることを示している。全てのタイプで、カテゴリー(集合体)に焦点があたり言語化される。このことを、カテゴリーを太線丸で表記している(実線丸または破線丸)。



(15)では、スキーマの構成要素は同じである。カテゴリーと複数の個体成員がある。違いは、カテゴリーと成員が持つ境界の違いになる。Type Aはカテゴリーが排他的境界、成員が弱境界、Type Bはカテゴリーが弱境界、成員が排他的境界、Type Cはカテゴリーも成員も弱境界となっている。つまり集合名詞には、カテゴリーまたは成員で、少なくとも一つ弱境界が入る。そもそも同じ名称、ここでは集合名詞で、カテゴリーと成員の両方を数えることはできない。というのもどちらを数えているか分からなくなるからである。そのためカテゴリーを数えるか[Type A]、成員を数えるか[Type B]、どちらも数えないか[Type C]になる。

この視点で分類するとき、3種類があるのみであって、それ以上でもそれ以下にもならない。この弱境界の条件を組みこんだものを、仮定義2として、(16)のように修正する(6節で最終版提示)。

(16) 集合名詞(仮定義2)

集合名詞とは、個体成員の集合体としてのカテゴリーに焦点があたり言語化され、カテゴリーまたは成員の少なくとも一つが不可算となる名詞である。

(16)では、1. 複数の個体成員を認識すること、2. カテゴリーは成員の集合体であること、3. カテゴリーが言語化されること、4. 成員かカテゴリーの少なくとも一つが弱境界であることを述べている。

しかし、ことはそう簡単ではない。実際のスキーマは必ずしも(15)だけではなく、さらに派生することがある。動詞の呼応で見たように、集合名詞の呼応は単数動詞、複数動詞の両方が取れる場合がある。これはスキーマ上でどこが前景化されるかの違いである。このことはスキーマ表記に反映される。こうしたことをタイプ毎に、次節から一つずつ見ていく。

5.1 Type A (カテゴリー(可算)、成員(不可算))

Type A は、具体的には、(17)のようなものが Type A となる((17)は久野・高見 2009: 62)。久野・高見(2009)の「仕切りのある集合体」に相当する。

(17) family, team, group, audience, crowd, committee, board, army, crew, staff, jury, class, club, etc.

カテゴリーが排他的境界で可算、成員が弱境界で不可算になる。そのため集合名詞で数えられるのはカテゴリーのみになる。(18)はカテゴリーを、(19)は成員を数えるものになるが、カテゴリーの方だけが適格となる。

(18) a family, two families, 100 families, many families, etc. (久野・高見 2009: 70)

(19) *two family, *100 family, *many family, etc.

このときスキーマは(15a)を基本とするが、主語と動詞の呼応で細分される。というのも Type A の集合名詞では、動詞は単数呼応、複数呼応の両方が可能になる。(20)(21)a は単数呼応、(20)(21)b は複数呼応の例になる。地域で傾向があり、前者がアメリカ英語、後者がイギリス英語になる。

(20) a. His family is not very big, just a typical family.

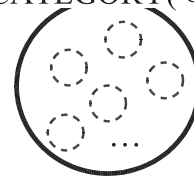
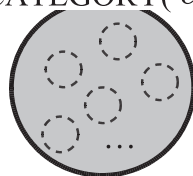
b. His family are all gathered in the garden.

(21) a. The team has won the 20th NBA Championship 2023.

b. The team have won the championship.

集合体であるカテゴリーに焦点が (22) a. CATEGORY(α) b. CATEGORY(α)

あたり前景化されれば、1つと見なされ単数呼応になる。そうではなく、複数成員が前景化されれば複数呼応となる。それをスキーマ



で表したものが、(22)になる。網掛け部分は背景化を意味する。(22)は(15a)を基本とするが、成員が背景化されるかどうかで異なる。(22a)では成員が背景化され、(22b)では成員が前景化されている。

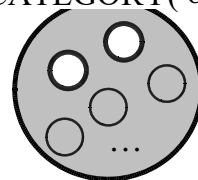
(22a)は単数呼応のスキーマとなる。成員が背景化されるため(網掛け)、カテゴリー(集合体)の方に意識が集中する。焦点があたるカテゴリー全体のみが前景化され、一つと認識され、動詞は単数動詞となる。一方(22b)では成員が背景化されていないため、個々の成員が前面に意識される。カテゴリー全体に焦点があたり言語化されるものの、複数成員が前景化されているため、意味的には複数となり、動詞は複数動詞となる。

これらの呼応は、Quirk, *et al.* (1985)で言えば概念的一致の原理に従う。しかし(14)に従えば、単に一番前景化されているものに、動詞は呼応しているに過ぎない。違いはあくまで成員の背景化の違いであり、それにより、主語と動詞の数の一致に違いが生じる。

(22)では集合名詞を使って、カテゴリーは数えられるが、成員は数えられない。カテゴリーは成員の集合体であって、いわばカテゴリーと成員は別のものを指し示している。そのため違うものを、

同じ集合名詞で数えることはできず、数えたとしても、カテゴリーか成員のどちらかに一方になる。Type A ではカテゴリーが可算となっているため、成員は不可算となる。成員を数えるには、集合名詞以外のものを使う方法が必要である。

具体的には、成員に可算名詞と紐付けすればよい。すなわち排他的境界をもつものと変えるのである。成員が数えられないのは、カテゴリーと同じ名称を使って数えられないだけである。よって別称を用いれば数えられる。例えば member など一般的な可算名詞で置き換える方法がある。つまり成員の弱境界を、排他的境界に変えることで可算となる。排他的境界を持つ名詞であれば、数えられる。スキーマを(23)に、例を(24)に示す。(23)は(22a)から派生しているが、集合体(カテゴリー)と成員の両方が排他的境界を持ち、可算となっている(実線 (23) CATEGORY(α) 表記)。これはとりも直さず、成員が排他的境界を持つ名詞で数えるからである。焦点は、カテゴリーにも成員にもあたっている(太丸)ので、どちらも言語化される。成員が一つであれば一つに、複数成員であれば、その数の成員が前景化され、あとは背景化される。可算名詞の数だけ、成員に焦点があたる(白抜き)。これと似たプロセスは Type B, C でも起こる。



- (24) a. He is doing well as a member of the team. b. Select the members of the group first.

5.2 Type B (カテゴリー(不可算)、成員(可算))

Type B には、cattle, police, people (人々)のような集合名詞が含まれる。久野・高見(2009)の「仕切りのない集合体」に相当する。久野・高見では、複数普通名詞と見なされていたが、本稿では集合名詞と考える((16)、及び後述する6節の定義から集合名詞に含まれるからである)。

カテゴリーが弱境界で不可算、成員が排他的境界で可算になる。集合名詞を使って数えられるのはカテゴリーか成員のどちらかなので、成員のみ数えることができる。(25)はカテゴリー全体を、(26)は成員を数えるものになるが、成員の方だけが適格となる。

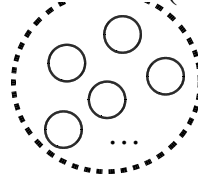
- (25) a. *a cattle, *two cattles, *many cattles b. *a police, *two polices, *many polices

- (26) a. two cattle, three cattle, many cattle b. two police, three police, many police

c. five people, fifteen people, many people (cf. 久野・高見 2009: 69-76)

このときスキーマは(27)になる。Type A の(22)と異なり、1種類しかない。というのも Type B では単数呼応が起こらず、常に複数の意味しかない。つまり(22a)に相当するスキーマ、成員を背景化するスキーマが存在しない。カテゴリー全体(集合体)に焦点があたり言語化される(太丸破線表記)が、成員が前景化され、意味的には複数になっているからと考えられる。よって動詞は(28)に示すように、複数呼応となる。集合名詞を使って、成員は数えられる。しかし集合名詞は、カテゴリーを言語化したものであり、成員を数えるとしても、(26)のようにカテゴリー名称自体が複数形になることはない。カテゴリー(集合体)が言語化されたものだからである。

(27) CATEGORY(α)



- (28) a. What people say is not always what people do.
 b. There were many people at the meeting.

なお Type A と似た(29)のような表現がある。Type B の成員は可算ではあるが、言語化された集合名詞そのものではない。そこで成員を、排他的境界を持つ可算名詞で置き換えて数えている。この場合、単数の成員の場合もあれば、複数の成員の場合もある。(23)のように、カテゴリーと成員の両方に焦点があたっているので、両方とも言語化されるが、カテゴリーは数えられない。

- (29) a. Mrs. Smith was escorted to the door by an officer of the police.
 b. A group of people wanted to work together to solve the problem quickly.

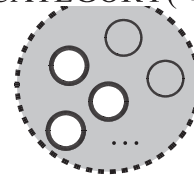
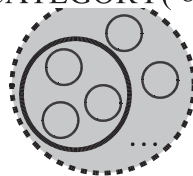
(29b)は「a bunch/set/group/party of + 複数形名詞」と並行的である(cf. 久野・高見 2009: 48)。というのもどちらも複数成員のかたまりが切り取られる形になっているからである。例を(30)に示す。このとき動詞は、単数呼応と複数呼応の両方可能である。

- (30) a. A bunch of flowers was presented to the teacher.
 b. A bunch of hooligans were seen leaving the premises. (Huddleston & Pullum 2002: 503)

ただし(29b)のように複数成員を a group のように単数で表す場合、動詞の呼応に注意が必要である。単数呼応と、複数呼応の両方が可能になるからである。このときスキーマは(31)になる。(31a)は単数呼応、(31b)は複数呼応のスキーマとなる。

- (31)ではカテゴリー、及び複数 (31) a. CATEGORY(α) b. CATEGORY(α)
 成員のどちらにも焦点があたり

(太線丸)、カテゴリーは集合名詞
 で、成員は group などで言語化
 される。違いは複数成員の背景化



の有無と成員のグループ化にある。(31a)では焦点があたる複数成員が背景化され、カテゴリー全体とかたまりとなる成員のグループ全体に焦点があたる。このとき成員のグループが一つと見なされ単数呼応となる。一方(31b)では複数成員に焦点があたり前景化されるため、複数と認識され、複数呼応となる。もともと数えられる成員を、別名称に置き換えているにすぎない。

スキーマ(31)の類例として、[A and B]がある。この表現では単数呼応にも、複数呼応にもなる。これも同様に、(31)に示すように複数成員が前景化されるかどうかで、動詞の呼応が異なる。

- (32) a. Time and tide wait for no man. (諺)
 b. All work and no play makes Jack a dull boy. (諺)
 c. Slow and steady wins the race. (諺) (久野・高見 2009: 51)

5.3 Type C (カテゴリー(不可算)、成員(不可算))

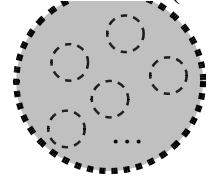
Type C の集合名詞に、furniture などがある。カテゴリーも成員も弱境界で不可算になる。したがって集合名詞を使って、カテゴリーと成員のどちらも数えることができない。(33)はカテゴリー全体を、(34)は成員を数えるものになるが、どちらも不適格となる。

- (33) *a furniture, *two furnitures, *many furnitures (久野・高見 2009: 77)

(34) *ten furniture (cf. ten pieces of furniture; ten furniture pieces) (久野・高見 2009: 78)

このときスキーマは(35)の1種類になる。Type Bと違い、成員が背景化されたスキーマのみになる。これはType Aの(22a)に相当する。カテゴリーも成員もどちらも弱境界で数えることは出来ないが、成員には個体成員としての認識がある。この認識があって初めて、カテゴリーが集合名詞と認識されるからである。前景化されているのは、焦点があたるカテゴリーのみなので、常に単数扱いで、動詞は単数動詞となる。例を(36)に示す。

(35) CATEGORY(α)



(36) a. The furniture is simple and very practical. b. There is a lot of furniture in this room.

このとき不可算の成員を、排他的境界を持つ可算名詞を加えることで数えることができる。これはType Aで成員を数えたのと、似ている。排他的境界を持つ助数詞を加えることで、可算になる。(37)は助数詞で成員一つずつを数え、(38)では成員のグループを数えている。

(37) a. Let me design a new piece/article of furniture.

b. I was stolen a few sticks of furniture.

(38) a. She designed many sets of furniture.

b. It was a whole series of furniture that the first company mass-manufactured.

Type Bと同様に、カテゴリー全体を数えることはできない。数えるためには、排他的境界を持つ可算名詞が必要となる。(38)は(31)と同様に分析される。

6. 固有名詞スキーマと、可算・不可算及び集合名詞の再規定

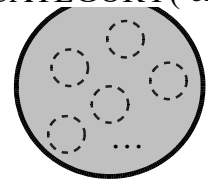
本節では、可算・不可算の基準を修正するとともに、集合名詞の定義を修正する。まずは集合名詞の定義から考える。集合名詞は、(4)で仮定義1、(16)で(4)を修正した仮定義2を提示した。しかし仮定義2では問題が生じる。(39)のような複数名詞を伴う固有名詞が、集合名詞とみなされてしまう。これらは主要部名詞が複数名詞の形をとるため、複数成員が意識される。集合体(カテゴリー)に成員と異なる名称が与えられ、他者と区別される明確な境界(排他的境界)を持つ。成員は、複数成員が意識されるが数えることができない。

(39) the United States of America, the United Nations; the Alps, the Himalayas, the Urals; the Bahamas, the Hebrides, the Maldives; the Netherlands, the Balkans, etc.

(cf. Huddleston and Pullum 2002: 517)

そのためType Aの(22a)と同じスキーマを持つと考えられる。スキーマの採録が(40)になる。さらに仮定義(16)で考えれば、これら固有名詞はType Aの(22a)の集合名詞になってしまう。ただしType Aであれば、排他的境界を持つカテゴリー(集合名詞)は数えられるはずだが、(39)はカテゴリーも成員も不可算である。つまりType Aの集合名詞とは、ふるまいが異なる。

(40) CATEGORY(α)



これは国や地名だけでなく、チーム名/音楽グループ/会社名においても同様である。(41)はチー

ム名、(42)は音楽グループ、(43)は会社名になっている。これらが単数形の場合、アメリカ英語では単数動詞、イギリス英語では複数動詞をとる傾向があり、地域差がでることも多い。複数形の場合は、複数動詞が呼応することが多い(cf. 久野・高見 2009)。いずれにせよ、こうした固有名詞は、(16)の定義では、集合名詞になってしまう。これらは単数呼応だけでなく、複数呼応もする場合があるので、Type A の(22b)の固有名詞も存在することになる。つまり Type A の二つのスキーマに対応している。

(41) a. AC Milan is the team of the working class.

b. AC Milan are owned by a US hedge fund.

(42) a. Kiss has sold over 80 million albums.

b. Kiss are a rock group.

(久野・高見 2009: 157-158)

(43) a. Microsoft is now taking this one step further by making them very easy.

b. Microsoft are creating Overview Plans Applications that will have new features.

ふるまいが違うものを Type A に含み入れることはできない。そのためこれまでの基準や規定を見直す必要がある。一つは可算・不可算の基準の見直しである。排他的境界があるのに、不可算になるからである。もう一つは、集合名詞の範囲の規定である。固有名詞は5節で述べた3分類には、ふるまいが違うため合致しない。しかしどうやって集合名詞から、固有名詞を排除するかにある。

集合名詞と固有名詞の違いから見ていく。本稿では違いは、排他的境界と上位カテゴリーの有無にあると考える。まず集合名詞と固有名詞では、排他的境界の種類が異なる。確かに(39)の固有名詞は、他者と区別する明確な仕切り(境界)を持つ。そのため(6)の定義では可算名詞となる。しかし固有名詞は、固有の個体に付与されているため不可算である。これは排他的境界が、集合名詞のものとは異なるからと考えられる。すなわち排他的境界には2種類あると考える。他種への排他的境界と、同種への排他的境界の2つである。

一つめの他種への排他的境界は、他種との対比でできる。a chicken を例に図示すると(44)のよ

うになる。(44)はカテゴリー CHICKEN

(44)

と異なる種類のことを背景化することで、

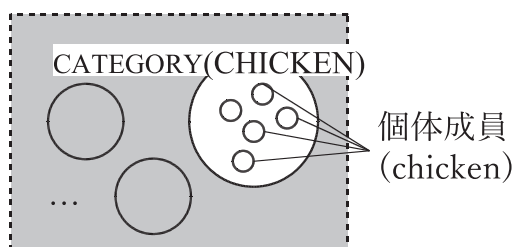
他種への排他的境界ができています。一方カ

テゴリー内の成員は、他種への排他的境界

と同種への排他的境界のいずれかを持つ。

(7i)の場合、他種への排他的境界、(7ii)

の場合、同種への排他的境界となる。

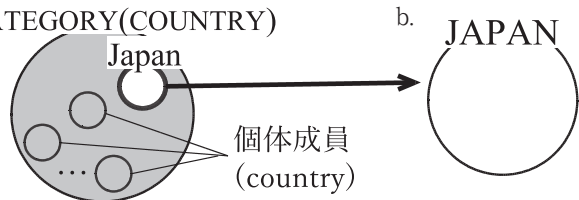


一方固有名詞の場合は、同種への排他的境界になる。同種の中での対比となる。カテゴリー COUNTRY 内の成員が固有名詞になった場合を考える。もともとは固有名が付かなければ、(44)と同様、各成員は他種への排他的境界を持つか、同種への排他的境界を持つ。それは(7i)か(7ii)のいずれかで決まる。成員同士で区別する場合は、特定する場合は定冠詞 the をつけたり、修飾語により修飾されたとしても、あくまで同じ名称から、はみでることはない。chicken であれば、the chicken (s)、a chicken であって、それが形容詞によって修飾されようと、あくまで chicken で表

現される。chicken の名称の外にはでない。

しかし固有名、例えば Japan が付与されると、もはやカテゴリー COUNTRY の成員とは言えない。country ではなく、Japan になるからである。いわば独立した存在となる。つまり上位カテゴリーの成員ではなく、単体としての存在となる。これを示したものが(45b)になる。(45b)はもともと何かの成員だったものが、

(45) a. CATEGORY(COUNTRY)
固有名をつけることで、上位カテゴリーを持たない存在となることを示している。上位カテゴリーがないとは、同類のものが



存在しないことを意味する。それゆえ不可算となる。唯一物ゆえに、成員ではなく、独立した存在になる。

(45a)ではカテゴリー内の成員は同種で、すべて country であり、他種または同種への排他的境界を持つことから、すべて排他的境界を持つ。しかしその一つの成員に同種他成員と対比させるために、例えば Japan と命名されると、同種への排他的境界を持ち、他成員をすべて強く背景化する(網掛け表記)。それに加え country ではなく、Japan と認識されるため、もはやカテゴリーの一成員と見なされず、独立した存在となる。それを示したものが(45b)である。(45b)は同種への強い排他的境界を持つ。この場合、カテゴリーという概念がなくなり、単体として存在するのみである。よって排他的境界を持つにもかかわらず、可算でなくなる。単一の独立した存在として扱われるからである。よって固有名詞は、通例の個体成員とは全く異なる。

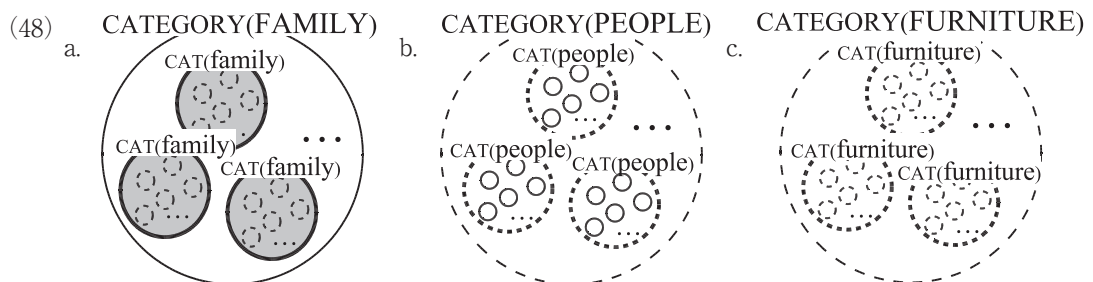
むろん固有名詞であっても、同名の上位カテゴリーがあれば、他種の排他的境界となり、可算名詞となることもある。この場合、固有名詞の特性を持った、他種への排他的境界を持つため、可算となる。(46)は名前が同じ人の上位カテゴリーが存在し、(47)は同一物ではあるが、いろいろな同一物の種類を成員とする上位カテゴリーが存在している。上位カテゴリー持つため、可算となる。

(46) a. I met a Smith at the party. b. She had a call from a Mr. Smith.

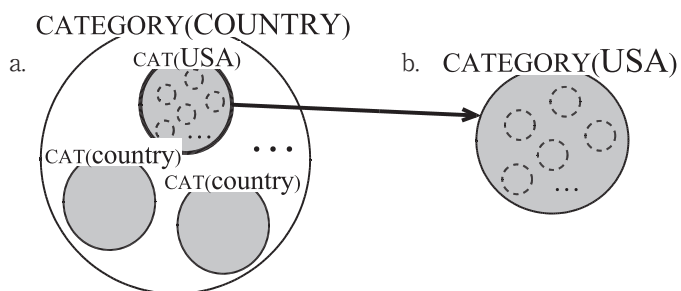
(47) a. This is a United States I prefer to forget.

b. It was a very different Paris from the old days. (Huddleston and Pullum 2002: 521)

ここで集合名詞に話を戻す。集合名詞の場合、成員がサブカテゴリーになっている。各成員が、それらの複数成員を認識するからである。スキーマで示せば、(48)のようになる。(48a)は Type A、(48b)は Type B、(48c)は Type C のスキーマになる(CAT は CATEGORY の略称)。



一方(39)のような集合体 (49) を表す固有名詞のスキーマは、(49)になる。(49)は the United States of America のものになる(USA と略記)。これは(45)と基本構造は同じである。(49a)はカテゴリー



CATEGORY の中の個体成員の一つだったものが、固有名 the United States of America を付けられることで、独立した存在となり、上位カテゴリーがなくなる。そして(49b)に示すような単一の独立した存在として扱われる。(45)との違いは、個体成員がサブカテゴリーになっているにすぎない。

ここで(6)の可算・不可算の基準は修正が必要になる。ここでは固有名詞を想定していなかったからである。固有名詞は上記で見たように、同名の上位カテゴリーがなくなり、単独の存在になっている。そのためそれを「同名の上位カテゴリーがある場合」と付記し、(50)のように修正する。なお(50)では、集合名詞を鑑み、成員のみならず、カテゴリーまで射程を広げ、「カテゴリーまたは成員」と修正している。(6)で述べた排他的境界の有無で、可算・不可算が決まるという主張は同じであるが、固有名詞を排除すべく、条件がつけられている。(51)は(7)の再掲になる。

- (50) **可算・不可算の基準(最終版)**：カテゴリースキーマにおいて同名の上位カテゴリーがある場合、カテゴリーまたは成員は、排他的境界があれば可算となり、なければ不可算となる。
- (51) **排他的境界の種類(= (7))**：排他的境界には、(i)他カテゴリーの成員と区別する特性(形態、種類など)、(ii)同一カテゴリー内の他成員と区別する特性(定量的特性(構成員、数量、時間、出来事、容器類)など)の二つがある。

これと同時に集合名詞の定義も修正が必要となる。(39)のような固有名詞を除外する必要があるからである。修正したものが(52)になる。(52)では「同名の上位カテゴリー」を追記している。つまり単体として、上位カテゴリーを持たない固有名詞を排除している。

(52) **集合名詞(最終版)**

集合名詞とは、個体成員の集合体としてのカテゴリーに焦点があたり言語化され、カテゴリーまたは成員の少なくとも一つが不可算となる名詞である。このときカテゴリーは、同名の上位カテゴリーを持たなければならない。

7. まとめ

本稿ではカテゴリー分析で集合名詞を考察し、3タイプに分類した。これは、成員またはカテゴリーの可算・不可算に基づいて分類したものである。3タイプをスキーマで表記し、それぞれの違

いを示した。これに伴い、可算・不可算の基準(緒方 2022)を見直した。一つめは、成員だけだったものを、成員とカテゴリーに拡張した。もう一つは固有名詞を除外すべく、同名の上位カテゴリーを条件に加えた。固有名詞の中には、集合名詞と似たスキーマを持つものがあるが、それらは排他的境界を持つものの、不可算になる理由をカテゴリースキーマを通して説明した。

これに加えて、集合名詞を規定した。集合名詞でのカテゴリーは成員の集合体であって、成員またはカテゴリーのどちらかが不可算であるとした。ここでも固有名詞が入らないよう、上位カテゴリーの文言を付記した。

また3タイプの集合名詞との動詞の呼応を説明すべく、主語と動詞の一致についてもカテゴリースキーマで考察した。そこではカテゴリースキーマで焦点があたったものと、動詞は呼応すると述べた。これは Quirk, *et al.* (1985)の3つの原理を、一つにまとめたものになる。

注

- *1 集合名詞に何を含めるかは研究者で異なるため、本稿では集合名詞を定義づけることで、含まれるか含まれないかの境界を明確にする。最終的な定義までに、2回修正を行う。
- *2 動詞の呼応だけでなく、(i)に示すように代名詞等でも呼応がおこるが、本稿では扱わない。
(i) Yesterday the Labour coordinating committee met for its annual get together (...). (Levin, M. 1998: 99)

引用文献

- Allan Keith (1980) "Nouns and Countability," *Language* 56 (3), 541-567.
- 久野暉・高見健一(2009)『謎解きの英文法—単数が複数か—』くろしお出版。
- 廣瀬浩三(2005)「新たな学習英文法の構築に向けて:「主語と動詞の一致」の問題を手がかりとして」『島根大学外国語教育センタージャーナル』創刊号, 35-51.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 木本幸憲(2012)「Furniture の非可算性に関する一考察」『日本認知言語学会論文集』12, 453-459.
- Leech, G. and Svartvik, J. (2002). *A Communicative Grammar of English*. Longman, London.
- Levin, M. (1998) "On Concord with Collective Nouns in English," In A. Renouf (ed) *Explorations in Corpus Linguistics*, 99-111. Rodopi, Amsterdam.
- Levin, M. (1999) "Concord with Collective Nouns Revisited," *ICAME JOURNAL* 23, 21-34.
- 緒方隆文(2022)「名詞における単数と複数」『年報』33, 79-91.
- Quirk, R. *et al.* (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Radden, G. and Dirven, R. (2007). *Cognitive English Grammar*. John Benjamins, Amsterdam.
- 高見健一(2005)「『集合名詞』は数えられるか?」『英語教育』54 (7), 30-33.

(おがた たかふみ: 英語学科 教授)